

## 10 研究会

11月5日（月）に学校支援課から3人の指導者と関西大学の森朋子教授を講師として招いて研究授業（文系3教科）と研究会を実施した。外部からも全員で16人の参観者（各務原西高校3人、大垣南高校3人、地区の高校6校より10人）があり、アンケートによる講評をいただいた。

以下に、当日の研究会の指導・講評と、研究授業の関係資料（授業デザイン、学習指導案、ルーブリック）及び授業者の振り返りを掲載する。



### 1) 学校支援課の指導講評

#### ア 上明代直哉先生（国語科）

内容の濃い授業であった。ALを通して生徒に力を付けさせようというのが明確であった。このことは指導案や授業デザインをみてもよく分かった。生徒もALを戸惑うことなく、受け入れており、普段から意識されているのを感じた。どの教科においても生徒たちの学びに向う姿勢が良かった。問いを工夫することで生徒の思考がアクティブとなっていた。特に印象的だったのが、教員の発問に対して生徒が「当ててほしい」という顔をしている生徒が多かったのが他校にはない所であった。生徒の「もっと学びたい」という姿勢が深い学びにつながると感じた。この取り組みを継続して県下に広めていただきたい。

#### イ 安部博貴先生（地歴公民科）

安藤先生の授業で一番キーとなる「問い」は「中世で武士はどのような役割を果たしたか」であり、「どうして武士が登場したのか」ということが説明できるかどうかで授業の成否が決まるというものであった。どうしてこのような問いが必要なのか。それは「思考力」を育むためである。地歴公民科において「見方・考え方」は「問い」で決まるといって良い。各教科でもこうした「見方・考え方」を意識して取り組んでもらいたい。「本質的な問い」は難しい問いであるが、それを探究するために必要なのが「協同的な学び」である。それを意識して授業や単元を組み立てていたと思われる。岐阜北高校も同様なテーマで取り組んでいるが、本質的な問いを「ジャンプ課題」として取り組んでいる。今後このような研究が、「探究的な学び」に繋がると考える。

#### ウ 二村文敏先生（英語科）

安藤先生の授業は構造化をして一本筋を通されていた。そのため非常に興味深いものであった。松永先生の授業は生徒を引きつけて笑顔を絶やさず深い内容となっていた。また、桑原先生の授業は、「生徒を学びから置いていかない」という姿勢を感じることができた。ALを通して、「深い学びに繋がる本質的な問い」は子どもたちが「普段考えないことを考えさせる」ことに繋がる。考えるという経験を3年間行うことで、経験という点と点がつながり線となる。最後は、色々な課題に直面しながら社会の中で必要とされる人材として活躍できる。こうしたことを思い描けるようになるよう指導を継続してもらいたい。

## 2) 森朋子先生（関西大学）の指導講評

この一年間全国の様々な学校を見て、「カリキュラムマネジメント」が大切だと思っている。大切なのは生徒が何を学んでいるかである。生徒の方が教員のスタイルに合わせているのではいけない。複数のスーパーティーチャーがいるよりも、全ての先生が同じ目標に向かってマネジメントすることによって「資質・能力」が伸びやすくなる方がよい。そうした観点で今日はCMとALの関係について話をさせていただく。



### ア) 今日の研究授業について

松永先生の授業について。とにかく明るい。生徒がこんなに明るい漢文の授業はない。先生と生徒の応答が上手くいっている。これはクラス運営がうまくいっている証拠でもある。教科教育に担任の先生のクラスづくりが大きく影響している。ただし、個人を基調としたグループワークは良かったが個人が考える時間が短い。考える間もなくグループワークになってしまい、友達の内容を写すことになってしまった生徒がいた。また、授業を教員が引っ張ってしまっている部分があったのも残念であった。特に最後の便覧と必携の違いは生徒が気づいて欲しかった。自分で発見することを求めるのなら詰め込みすぎであったかもしれない。全てをグループワークにする必要はない。

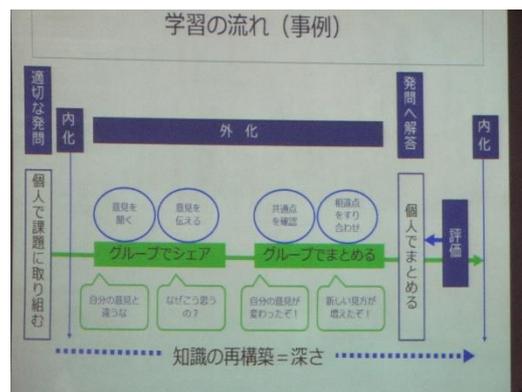
桑原先生の授業について。生徒が all English や AL の授業に慣れている。また、「テーマ性」が優れている。「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」になっており、自分の目線で捉えられている。英語は社会の問題や色々な問題を取り入れるのには適している。「想像する」「推論する」も重要なことである。ただし、最後にグループ活動で発表することに意味があったのかが疑問である。「ワールドカフェ」方式をとるなどの方法もあった。また、生徒が書いたものを間違っても共有できればそれで良いのではと感じる。しかし、これだけ先生のことを生徒がしっかり見ている授業は珍しい。

(安藤教諭の授業は時間の関係で参観できなかったのでコメントはなし。)

### イ) AL の 3 つの要点 (昨年度の講義の復習)

AL は活動も思考もアクティブでないといけない。先生方の想定を超えた解答が出てくる必要がある。そしてそれを使って授業を行っていく力量が必要である。そこでカリキュラムを検討しなければならない。

上手くいっている AL の 3 つのポイントがある。① 内化と外化、②個人を基盤とするグループワーク、③学習から理解が始まる事前学習、④安心安全のクラスづくりである。高度の AL を続けていると生徒は「何が分かったのか」分からなくなってしまう。そこで「習得」が重要である。昨年度お話ししたように、「内化→外化→内化」の流れを 2 対 4 対 4 で行って、最後にしっかり知識を習得させてほしい。



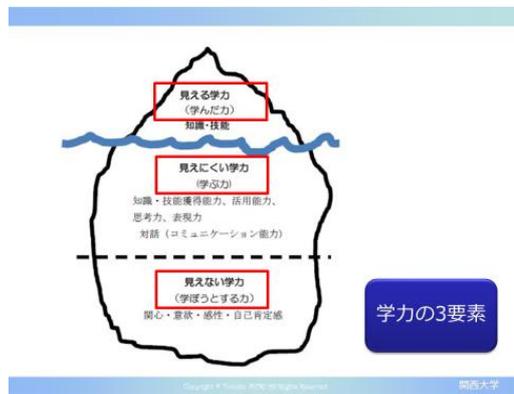
### ウ) 学力の 3 要素 (「生徒が必要とする学力とは」)

生徒の学びをライフ・成長の観点で見ることが重要である。今後の生徒は人生 80 年生きていく中で、最初の職で退職まで勤め上げる者はほとんどいなくなり、キャリア・チェンジが必須になってくる。

そういう社会の中で注目される学力は何か。「冰山モデル」で説明すると、「見える学力」(知識・

技能)が重要だと言われてきた。それを支えているのが「見えにくい学力」(思考、判断、表現力)そしてその下には「見えない学力」(関心、意欲、感性、自己効力感)がある。後者2つの力を育てなければ、「見える学力」は育たないと言われている。その重点が高校から社会に至るに移ってきている。企業では後者2つの力が大きく育っている学生を面接やインターンシップなどで採っている。同様に大学でも入試段階から4年間いるうちに後2つの学力観に重点がシフトしている。これが入試改革に繋がっている。

あと数年後には「Society5.0」と呼ばれる超スマート社会が到来する。そうした社会では、働き方が大きく変化する。自分で調べ、試行錯誤し、新しい情報を手でできる力が付いていれば、AIに替わられることはない。もう一つ、OECDが言う“Agency”つまり「社会を変革していける力」やどんな職や役割でも所属する社会や組織を改変していくのに貢献できる人材が注目されている。校則の妥当性を生徒が自ら検討していく力などの“Student Agency”もある。しかし、先生が引いたレールの上を生徒が走っているようではこうした力は身につかない。こうした力を生徒がどういう所で身につけているかを調べると、大抵は「行事」「部活動」「アルバイト」と答える。授業では大人しく先生の言うことをきいて、放課後になったら「21世紀型スキルを身につけましょう」では残念である。授業の中でもそうした配慮をお願いしたい。



「見える学力」について。「東ロボプロジェクト」でAIは進研マーク模試で偏差値57が出た。確かに、穴埋めや計算問題、固有名詞の暗記は得意だが、全体の要約や規則性の類推など複雑な知識を組み合わせる解くことが苦手であることが分かった。「見える学力」だけでAIと比較すれば、偏差値57以下は機械化に取って代わられることになってしまう。だからこそAI時代を迎えるにあたり、①問題の意味を読み取る「リーディング・スキル」、②抽象的な言い方を自分なりの言い方に捉え直して発信する「言語スキル」、③自らの実体験に基づいて論理的・想像的に推論する力を伸ばすことが大切である。

### エ) カリキュラム・マネジメントについて

カリキュラム・マネジメントとは、「カリキュラムを主たる手段として、学校の教育目標をよりよく達成していこうとする営み」である。つまり学校の教育目標を達成するツールがカリキュラムである。学習指導要領では、①教育目標の達成、②教育のチェックシステム、③外部の人材協力がポイントとされている。重要なのは「教育目標」である。

「教育のデザイン」においては、学校の校風・歴史・文化・地域の特性という「変わらないもの」と社会や学習指導要領という「変わるもの」を併せて必要となる「見えない学力」「見えにくい学力」を明らかにしていく。学習指導要領は10年に一度変わるので、5年に一度学校目標を見直していくことをお勧めする。そして、学校の教育目標が各教科の縦のカリキュラムと学年の横のカリキュラムの中でどのように実現していくかを考える。各カリキュラムの目標が決まれば各授業で育ていく「資質・能力」が決まる。それらをどのような方法で育むのかがALである。各教員が自分の好きな方法を用いるのではなく、力を身につけるための方法を考えて導入することが大切である。

「授業のデザイン」においては、学問の特性や教師の教育理念が「変わらないもの」であり、学校の教育目標や生徒の資質が「変わるもの」となる。これに合わせて、授業の学力の三要素(見え

る学力、見えない学力、見えにくい学力)を決めていく。そしてそれに適合する教育方法を導入し、生徒が目標を達成したかを評価する。多治見高校の場合はここにルーブリックを入れている。

CMの実践事例として、東京都立F高校を紹介する。以前は字のいっぱいある教育目標で分かりにくかった。そこで簡単に授業の中に落とし込めるように4つに整理した。そしてそれを学年、教科でどのように実現していくかを検討した。さらに、教科と探究の時間の区別も考慮した。これが学校の特徴となる。「習得」「活用」「探究」の範疇を整理する必要がある。

次の事例として、兵庫県立K高等学校を紹介する。第1に、授業でも教科でも探究活動を取り入れている。教科の内容が分かるといった「垂直的学習」と物の見方が変わったり異なるものに触れてギャップを感じることでおこる「平行的学習」をどのように往還していくか、どのように位置づけて学校の学びをつくっていくかを考えている。第2に、PDC Aサイクルを逆向き設計で実施する。教育目標が決まった後に、「何で検証するか」のツールを決めていく。ツールはルーブリックだけではない。K高校ではK J法を繰り返して3つの力(「人間的魅力」「批判的思考力」「挑戦する勇氣」)にまとめた。そして各力に3つずつ、全部で9能力を分類し、それを教科、教科外のどこで身につけさせるかをチェックするリストを作った。さらに、毎回授業後にスマートフォンで生徒にアンケート調査を実施した。この結果をもとに授業後に先生方が検討会を実施した。先生方にもアンケートを実施した。このように先生と生徒の声を摺り合わせながらマネジメントしている。

The table is a grid with columns for '学年' (Year) and '教科' (Subject). The rows are categorized into three main areas: A (Interpersonal Charm), B (Critical Thinking), and C (Courage to Challenge). Each cell contains a small icon or symbol representing the presence or absence of a specific skill in that context.

最後にもう一つ事例を紹介する。関西大学初等部では、「ミューズ学習」として、思考力を目標とし全ての教科で指定したツール(「比較」「分類」「多面的に見る」など)を使って授業することを求めている。これらのツールを使って色々な情報を分類して自分の言葉に置き換えて理解することを行っている。高学年になると自分でまとめて隣と交流できるようになる。毎回の授業で6年間やるので子どもにとっては伸びたこと、成長したことが実感できる。これこそCMである。学校としてフレームワークを導入することも良いのではないかと考えている。

**オ) クロージング**

分かったことが固定化するのではなく、分かったことを授業で使う中で「揺らいで分かり直す」が繰り返される。これが「深い学び」である。ヘレン・ケラーが語ったように、“unlearn”つまり「分かったことを自分が分かるように学び解してもう一度編み直す」が大切である。授業で学んだことを使ってALをし、最後もう一度先生方がティーチングすることが重要である。

CMはALの効果を最大限に引き出す。それには教員同士の協働活動が重要である。多治見高校が「目指す生徒像」に向かって行くのであれば、もう少し具体化すると良い。その上で先生方の認識を摺り合わせる必要がある。また、「生徒が方向性を分かっているか」を問うことも大切である。さらに、感覚や思いつきではない、データをもとにした先生方の議論を基盤にしてもらいたい。